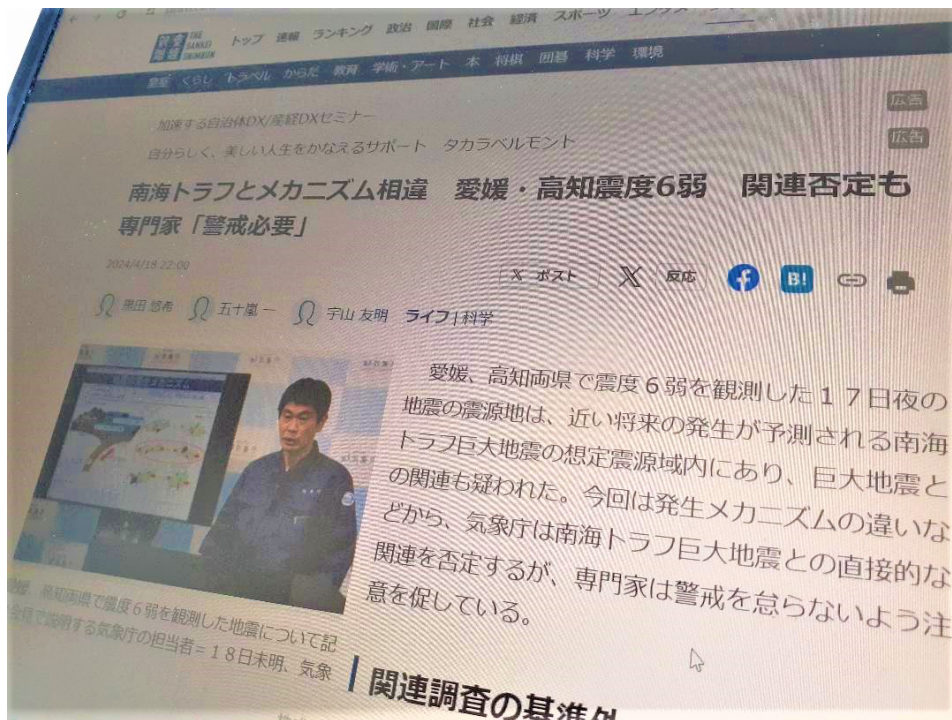


17日に発生した日向灘地震。たびたび、ここでは割と大きめの地震が起きる。筆者も数年前に、神話の取材で宮崎神宮の境内にいたとき、宮崎で震度5強を記録した地震が起きた。神社の建物があちこちでギシギシうなり、思わず身構えた記憶がある。

今回は、たまたま、震源が四国側の陸地に近く、愛媛、高知の西部で被害がみられた。震源は海底のプレート内であったが、地震のエネルギーが大きくなかったこともあり、気象庁は間もなく、津波の心配はないと広報した。

筆者は、高知西部の黒潮町を定点観測地にしており、地震のたびに連絡をとって、被害の様相や避難状況について聞いている。同町は南海トラフ最前線の高知県のなかでも、想定される津波高が3.4メートルあまりと厳しい土地柄なのだ。

今回の地震では、少なからず避難した人々がいた。中には、高台に移転して新設された町役場の駐車場で一晩過ごした家族もいたという。東日本大震災のころは、役場庁舎は浜側の低地にあり、駐車場も現在の数分の1の広さだった。その後、南海トラフ地震特措法に関連した国からの補助金もあり、約1キロ北側で、かつては山城があった高台に移った。



気象庁は早々に津波の心配なしと広報したが、被災地の愛媛、高知の西部で意外と避難者がみられた

役場は低地にあったころは、役場は避難場所にはならなかったが、現在は大規模駐車場を持つ立派な避難場所だ。これまた、最近拡張された幹線道路がすぐ下にあり、車で避難するにはもってこいの場所となった。車による避難については、東日本大震災など津波地震で、津波に巻き込まれたケースもあったことから、原則徒歩でと政府が推奨したこともあったが、黒潮町のように、以前とは見違えるような町の構造になってしまえば、車による避難は否定されるべきものではなくなった。筆者は何度も現地で取材し町の変遷もみてきたが、沿岸部の住宅地から高齢者は徒歩で1~2キロも避難するのは至難のわざだ。もっとも、この沿岸部の住宅地の中には、津波避難タワーがいたるところにあるが、基本的に遮蔽物のないタワーで一晩以上を過ごすのは不可能だ。

近年ようやく、防災を念頭において災害報道がみられるようになってきたが、状況の変化を無視して、原則論だけで報道すると、逆効果になりかねない。その原因は情報を発信する側の行政にあるのだが、防災は命に直結するだけに、慎重さと論点を明確にすることが求められる。今回の地震では改めて、そのことを感じた。

(令和6年4月)